

---

# ムジカ

由樹

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ムジカ

### 【Nコード】

N1567A

### 【作者名】

由樹

### 【あらすじ】

中学二年生の高梁彩音。少し冷めた、大人っぽい彼女が田舎の中学校に転校する。自分には歌しかない。…そんな彼女の、成長物語。

o p . i 笑顔と音楽と（前書き）

私には歌しかない  
歌を歌えば気分が軽く  
主人公にだってなれる  
歌は自分を解放する  
唯一の方法なんだ

## o p . i 笑顔と音楽と

青く晴れた夏の日。

一人の転校生がやってきた。

そこは田舎の中学校で、辺りには山も海も川もある。

空気がきれいで、避暑地にもなる澄んだ場所。鳥のさえずりは心を軽く弾ませる。

「いらっしやい、彩音ちゃん」

優しい優しいおばちゃん。

転校生、彩音の母親の妹で、結婚するときには都会からここに移住した。

「こんにちは、お世話になります」

「よく来たね。疲れたでしょう。二年生からだなんて中途でいやかもしれないけど、皆心根が良い子ばかりだからすぐ仲良くなれるわよ」

「…はい、楽しみです」

おばちゃんは気付いているだろうか。

彩音の笑顔には心が入っていないこと。偽物だということに。他人と仲良くなるつもりなどない。

ただ義務教育を終え、勉強して奨学金で高校、大学へ進学する。

勉強に良い環境にいるために空気の良い田舎、人の良い人達に囲まれて暮らそうと思った。

予備校や塾なんかには頼らない。必要最低限の人と潤滑に関わるこ  
とが出来れば良い。

「あの…散歩してきて良いですか」

いつの間にか身についた笑い方。

良い笑顔ね、なんて誉められたことは何度もある。相当の演技派なんだ、きつと。

「まだ慣れてないんだからあまり遠くに行っちゃだめよ。森や山は

特に危険だからね」

「わかりました、行ってきます。」

木々には興味が無い。川か海に行きたい。人が来ない自分だけの場所を見付けたいんだ。

「はあ……」

海に出るにはもっと歩かなければ。体力はあるから辛くはないが、気持ち焦る。

すっと潮風の香りが漂う。

海は近い。新品のサンダルは足に馴染み、どんどん歩いて行ける。

自転車は来週には届くから移動に困ることはなくなる。

「あつ……」

キラキラ、キラキラ。

波が太陽に反射して、まるで宝石のように輝く。

海など見るのはいつぶりだろう。

もう記憶の片隅にしか残っていない。

両手を両親に握られて、一番彩音が幸せだった時。

周りには誰もいない砂浜。

民家は遠く、蟹が歩くだけ。ここなら大丈夫。思う存分歌える……。  
すっ

息を深く吸う。お腹、肺、身体中に深く、深く。頭の中にメロディ  
ーが流れる。

今日から始まる 新しい世界

悩み 全部抱えて 今……

胸痛めて歩いた日々も いつか 誇りになるように ……

歌詞も曲も、ふと浮かんだものをそのまま歌う。

好きな歌手の歌ももちろん歌うが、気が付くと口ずさむのはそんな  
歌。

自分の内面を表現するとかそんな大袈裟なつもりはない。

ただ、歌っただけ。そしてこれが彼女の一番、好きなこと。

o p · i 笑顔と音楽と（後書き）

新連載です。今までと雰囲気を変えてみようと、挑戦してみます。  
感想、評価などお願い致します

op・2 純粹な笑顔達

「ふう……」

清々しいのだけど、同時に空虚感も味わう。

何故なら今歌った歌をもう一度歌うことが出来ないから。

ワンフレーズだけ覚えていることはある。でもそれもすぐに忘れてしまう。

歌っているときは力強いのに、終わった途端に儂さを持つ。

でもこの爽やかな風に吹かれながら歌うことは、何にも変えられないと思う。

とさっ

砂浜に腰を降ろし、遠くまで目を凝らす。

小さく漁船が一艘見えるだけで観光客はいない。夏休み中だからシーズンだろうに、人っ子一人いないなんて、実は穴場だったのかもしれない。

「眠い……」

ぼつり、呟く。

誰もいない自分だけの空間。

なんて心地よいだろう。

おばちゃんの家に戻るのはまだ後で良い。

今だけは本当の自分でいたい。人と話すなんて煩わしいことではないのだから。

とさっ

今度は勢い良く寝転ぶ。

洋服が砂だらけになるだろうが気にしない。

どうせ古いタンクトップと短いジーパンなのだし。

ふと気付いて新しいサンダルを脱ぐ。

これはまだ汚すわけにはいかない……。結構気に入っているのだ。

目を瞑ると、太陽の光を感じながらゆっくりと眠れそうだった。誰

もないのだし寝てしまおうか…。  
ふっ

太陽光が遮られる。反射的にパチツと目を開ける。

「ふわっ」

息を吸い込みながら、声にならない驚きの声を出す。

それもその筈、見知らぬ少年が顔を覗きこんでいるのだから…。

「あーなんだ、起きてたかつ。具合悪いかと思って来てみた」

にこにこ笑って、良かった良かったと言ってくる。彩音と同一年くらいだろうか。

なまっているわけではないのだが、特徴のあるのんびりとした話し方をする。

「あの…近いんですけど…」

寝ている彩音の頭の方に立ち、覗きこむ少年の顔は彩音の顔と十センチ程しか離れていなかった。

下手に動くつぶつかつてしまいそうだったので身動きがとれないでいた。

「んー？ああ、悪かったな」

少年の黒く焼けた健康的な肌は、白い歯をより惹き立たせた。顔はきりつとしまっていて整い、格好良い部類に入る。

「お前、越して来たんか？」

「あ、うん。よろしくね」

起き上がりながら、いつもの笑顔を浮かべる。

「おうっ」

にかつと笑う少年の顔は汚れを知らない純粹な顔だった。

「俺、土屋健太。中二」

彩音の自己紹介を待っているようだったので、

「高梁彩音、十四歳。それじゃあ…私帰るから」

さっさと立ち去ろうとする。

折角良い気持ちで、新しい場所を満喫していたのに。この、健太とかいう少年のせいで台無しになってしまった。

この辺には中学校は一つしかないというからきつと同じクラスになるだろう。

「おーそっか。じゃあまたなにかっ

白い歯が輝く。

こういう素直な人とはあまり話したくない。

自分のペースを乱されそうだし、何より……。

「…まあ、いいや」

同じクラスだろうがただ笑顔を作って生活すれば良い。

面倒に巻き込まれそうになれば真顔に戻る。

そうすればあつちが驚いて近寄らなくなるだけだ。

「只今」

台所で音がする。

トントン…

包丁とまな板の音。

お味噌汁の良い香りもする。

彩音は好き嫌いも食物アレルギーもないので何も心配することはない。

静かに階段を上り自分の部屋に行ってみる。

カララ…

木の板が部屋をしきっていた。少し古ぼけた机と椅子。ライトもちやんとついている。

窓を開けると涼しい風が流れてくるこの部屋は日当たりも良く、快適に暮らせそうだ。部屋は四畳半あるし問題無い。

「あー…着替えなきゃ」

さつき砂浜で寝転んだことを思い出す。

ぼそぼそと独り言を言うのは癖になっているようだ。

薄い生地ワンピースをさらっと着る。

黒く長いストレートの髪は痛みを知らず、洋服の黄色とよく合う。

一人床に座り、ぼーっとしていると、ドタバタと階段をかけあがる音がした。

ガラッ

「彩音ちゃん?! あついた! 元気? 澄海だよっ」

柳瀬澄海。おばちゃんの一人娘で彩音の従姉妹。彩音と同い年だ。おばちゃんが初めてここに来たとき、あまりにも海が澄んでいたらとつけた名前。その話を聞く度に、彩音はなんて単純なのだろうと呆れてしまう。

「どうしたの? 疲れた?」

賑やかに人を和ませることが出来る子だと、誰もが喜んでいたっけ。

彩音にとっては騒がしいだけなのだが。

「あつ、ごめんね。澄海ちゃん久しぶりだなーって思って慌てて笑顔を作る。」

この子とは仲良くしなければならぬだろう。

もっとも、彼女は名前の通り心がきれいな子なので嫌われるとは思わないが。

「ほんとー懐かしいよねっ。夏休み終わったらさ、毎日一緒に学校行こうね。澄海、ずっと今日を楽しみにしてたんだあ〜」

夢を見るような顔で彩音に話しかける。テンションも声も高い。

「そだね、楽しみ」

こんなに煩い子だったかな、と彩音は思いながら話を合わせる。

「そうそう、今日も川で遊んでただけどー、明日も行くから彩音ちゃんも行くこっ。」

友達に紹介したいな。彩音ちゃんってきれいだから皆ビックリするよあ〜」

何がそんなに楽しいのか、彩音はわからなかった。

自分のことをきれいだなどと言う意味もわからないし、川で何をやるのかもわからない。この子と一緒に暮らせるのだろうか…。

「あ。そだ。もう夕御飯だつて。行こっ」

唐突に話を変え、部屋を出て行く。

さっきの少年はのんびりしていそうだったが澄海は早口でせわしい。正直、疲れる。

「彩音ちゃん??早くう」

階段の下から声がする。

これからの生活が不安になってきた。

高校生になったらこの田舎を出て一人暮らしをしようかと本気で考え出した彩音だった。

o p . 3 此処での生活

「おっはよーん!」

ガラッ

彩音の部屋の戸が開けられる。

「あっごめん! 見るつもりとかなかったんだけどっ…」

朝からハイテンションで彩音の部屋に来た澄海。

丁度彩音が着替えている最中だった為慌てているのだ。

「ちよっ… どうでも良いけど閉めてもらえる?」

背中を見られただけだし、女の子なのだから恥ずかしいとは思わない。

でもいきなり人の部屋に飛込んでくるのはどうかと思う。「あっ…

そだね。ごめんなさいっ」

ピシャッ

慌ただしく戸が閉められる。

(もう… なんなのよ…)

昨日の彼女の様子と鍵のない部屋で多少は不安を感じていたが、それでもまさか朝っぱらからやって来るとは思わなかった。

「ふう…」

溜め息一つ。

これも癪。幸せが逃げる心配はない。もうそんなものなんて諦めている。

「おはようございます」

とんとん、と軽やかに階段を降り、台所へ向かう。

「おはよう。澄海がなんかしでかしたみたいね、大丈夫?」

心配そうに彩音に話しかけるおばちゃん。申し訳なさそうにしている。

「ごめんね、彩音ちゃん。家に彩音ちゃんがいると思うと嬉しくって、ついはいしゃいじゃったの…」

しょんぼりする澄海。彩音はふっ、と笑い、  
「大丈夫。すぐくびつくりしたけど、次からやめてもらえば良いから」

さりげなく釘を刺しておく。

最初が肝心なのだ。仲良くしなければならぬからといって、甘い顔をしていてはペースを崩されかねない。

「うんっ、気をつけるねっ。ねえねえ、川なただけどさあ、お昼食べてから行く？」

(川……)

本気だったのか。

一人でのんびりするの好きだが、澄海とその友達とだと変な気を使わねばなくなるだろう。

学校で一匹狼でいるのは構わないし、むしろ気楽で好むのだが澄海がいるとそうもいかない。

「ん……。もうちょっと慣れるまで、一人で散策しても良いかな。川も楽しそうだけど、また今度誘ってくれると嬉しいな」

にこつと笑えば相手は何も言えなくなるし、嫌な気もしないもの。この手が一番良いのだ。

「そっかあ、わかった。遊びたくなったらいつでも言ってね！友達にも彩音ちゃんの話しとくから」

(私の話……?)

一体何をされるのだろう。別にどうでも良いけど、出来れば話題にもしてほしくない。放っておいてもらえるのが一番良い。

「うんわかった。有り難う」

「さ、ご飯終わったら自分で食器下げなさいよ。澄海はいつも出しっぱなしにして遊びに行っちゃうんだから」

余計なこと言わないでよ……と笑いながら食器を持って立ち上がる澄海。彩音も片付ける。

おばちゃんと澄海がテレビを見出した頃、彩音は自室に戻って勉強を始めた。

東京で買っておいた参考書。半分までやったのでもうすぐ終わる。この家の近所には商店街があるので、本屋や美容室、小さなカラオケ屋もあるらしい。

コンビニやスーパーは自転車で一時間程かかるので、車で行くのが一般的だということだ。

MDコンポを持って来たので、音楽を聞く。

軽く口ずさみながら数学の問題を解いて行く。

簡単だと思えるようになった某塾の問題集。

受験用のものなので、今中二の彩音がすらすら解けるなら受験にはなんの心配もいらないように思える。でも彩音はあくまで“奨学金”で学校に行くことを目的としているから安心など出来ないのだ。何時間経つたらう。階下で彩音を呼ぶ声がする。

「彩音ちゃん、ご飯の支度が出来ましたよー」

おばちゃんだ。そういえば小腹が空いてきた。

「はい」

少し高めのトーンで返事をする。

美味しい昼食を食べながら、午後はまたあの砂浜に行こうと考えていた。

o p . 4 秘密の共有

いつかは 君がいた  
ふと 思い出し 涙

この世はきつと

冷たく 寒くて

辛いものなのでしょう？

でも貴方には感じるの

暖かさと優しさを

思ったより声が出る。程良く乾いた空気が、音をよく響かせてくれる。

カサツ

「？」

砂浜に立っている高い木によっかかりながら、音がした後ろの茂みをちらつと見る。

「！」

また、男の人。がっちりした体格に、昨日の少年、健太のような黒い肌。目は大きな二重瞼で彫りの深い顔立ち。髪の毛はとても短くうっすら立っているだけ。

何も言わず、じつと見つめてくる。強い眼差しが痛い。

威を決して話しかける彩音。

「あの……何か？」

一体何歳なのだろう。彩音と同年にも、三、四歳年上にも見える。

「お前…歌を歌うのか？」

「…っ」

聞かれていたんだ、と彩音は思う。

誰にも知られずにさりげなく歌うことが大好きだったのに。

「歌は、好きです」

答えにならないような返事をする。

「今歌ったのは誰の歌だ？」

単調に質問をする男の人。

「今のは…私が適当に創った歌です」

何をしたいのか掴めない。無表情な顔。

「もう一度歌って欲しい。最初からずっと」

痛いところに来た。もうさっきのメロディーなど流れ去っている。

「もう歌えないんです。思い付きで歌っただけだし、歌詞も浮かんだ曲にいい加減に合わせてるだけだから…」

「本当か…？」

答える代わりに頷く。

「もったいないとは思わないのか？あんなに歌が溢れているのに」

(もったいない…?)

「ええ、別に。少し淋しいとは思っけど」

自分の歌に価値などない。儚く消え行くだけの存在でしかないのだ。

「それはおかしい。心に染み入る声をしているのに。曲も歌詞も浮かんでくるのに。才能だとは思わないのか？」

「はい」

才能などない。気ままに歌っただけだし、それを残すことさえできないのだ。

「でも、歌は好きなんだな？」

「はい」

これにも即答出来る。歌は唯一の心の在り家だから。

「よし、なら来い」

いきなり彩音の華奢な右手首を掴み、ぐいぐい引っ張って行く。

彩音はなんとか着いて行くので精一杯だ。

「あのっ…どこ行くんですか！痛いんですけどっ」

堪らず声を張り上げる。

「うん、良い声だ。しっかり響いてる」

「ちょ…ちょっと…」

悪い人には見えないが周りが見えてないような感じだ。右手がビリビリする。

「ここだ」

(…?)

森の中にそびえたつ一軒の建物。

「学校…?」

たくさん鳥のさえずり。どこからか川のせせらぎも聞こえる。

「俺たちが通う学校だ。お前は…どこに通っているんだ?」

ふと不思議になったように彩音に訊く。

「私は…どうなんでしょう。最近越して来たので、中学校の場所は知らないんです」

「そうか。まあ良い。音楽室に行こう。仲間が待っている」

「えっ?仲間ってなんですか!」

ズルズルと引きずられ、校舎に入る。木の良い香りに包まれ、とても雰囲気が良い。

ガラッ

「芳!今頃来たのか、遅刻だ」

戸を開けるなり彩音を引きずってきた男に向かって声が飛んでくる。

「ああ、今スカウトして来たからな」

「スカウトお?…ああ」

男 芳に手を掴まれ、固まっている彩音に気付く女の子。

随分男っぽい喋り方をしているが、目はパツチリと可愛らしく、ベリーショートベリーショートの髪型がよく似合っている。

「アンタ大丈夫か?怖がらなくて良いよ。芳は人見知りをする優しいヤツだから。めぐにとつちゃあ、ただのノロマだがな!」

あっははは、と豪快に笑う“めぐ”。

「圍。あまりペラペラ喋らないで欲しい。折角ボーカルボーカルを連れて来

「たんだから」

真剣な表情の芳。圍は楽しそうな顔をして、

「そっかぁーお前でも納得出来る人材がやっと見付かったか！そりゃあ逃がしたくないわな。それにしても、よく連れて来れたもんだよ。えつと……何ていう子なんだ？」

彩音の方をちらつと見て、芳に名前を聞く圍。

「ああ……訊いてなかった」

「はあっ?!」

すつとんきような声をあげ、慌てる圍。

「おっ前……無理矢理連れて来たのか？バカ！悪いな、女の子。名前はなんてーんだ？」

名前……。そういえばまだ名乗ってなかったし、男の名前も圍という人の発言によって知つたのだと気付く。

「彩音……。高梁彩音です」

取り敢えず、いつもの笑顔を浮かべておく。

「彩音か。私は圍、キーボード担当。めぐって呼んで。このおっきいのは杉本 芳。ドラムもベースも出来る」

「えつ……。あの、私はなんでここに？」

人に振り回されるなんて初めてだから、少し慌てる。

キーボードにベースやドラムだなんて、まるでバンドのようではないか。

「なんだ芳……。お前、拉致して来たのかよ」

呆れながら圍が説明し始める。

「めぐと芳はずつとここで育つて、曲を作つて演奏して来たんだ。もちろん遊びで。」

中学に入った頃、いきなり芳がバンドやりたいつて、神妙な面持ちで言つて来てさあ……」

その時のことを思い出したのか、軽くぷつと吹き出す圍。

「圍……余計なことは言つなよ」

「はん！彩音が可愛いから良いトコ見せたいんだろ。無理無理、こ

の辺で彩音に釣り合うヤツはいないよ。少なくとも見た目ではな  
ケラケラ笑い、話を続ける圍。彩音はあくまで“笑顔”を続けて  
いる。

「どこまで話したっけ。とにかく、そんなこんなでバンドをしよう  
って話になっただけけど、よく考えりゃボーカルがない。めぐが  
弾き語りしても良かったんだけど、なんか違うだろ？」

「違うって…別におかしくなんかないけど」  
少々戸惑いながらも、話に加わりだす彩音。

「んー…まあ、そういうことにしとけ。でな、芳がボーカルを探し  
て、めぐが機材を揃えることになったのさ。マジ頑張ったぜ。後で  
見せるけど」

「うん…あれは、流石圍としか言えなかった」

余程、良い機材を揃えたのだらう。芳の瞳が一層力を持ったよう  
に見える。

「で、やっとボーカルゲットってわけよ。やってくれる？」  
歌を、皆に聞かせることになるんだ…、と躊躇う彩音。

「機材を見せてもらえる？」  
バンドというものに興味が無いわけではない。設備を見てみたい  
と思った。

「ああ、来な。防音は出来ないけど、良いんだなーこれが」  
自慢したい気持ちを隠せないらしく、楽しげに進んで行く圍。そ  
の後に彩音、芳、と着いて行く。

音楽室の隣の小さな部屋に、宝が隠されていた。

#### o p . 4 秘密の共有（後書き）

新キャラ続々登場です。圍は元気に喋ってくれるので話を動かさず、本当にいい子です…。だんだんとお話も動いて来ました。感想やアドバイス等ありましたら宜しくお願いします。ここまで読んでくださり、有り難うございました

o p . 5 初めての喜び

「あ……」

すごい……、そう心の底から思った。

でも感情を素直に出すことが苦手な彩音は、少し驚いた顔をするだけだった。

音楽室の隣のスタジオは、防音にはなっていないものの、キーボード、エレキギター、ベース、ドラム、マイク等々バンドに必要なものは揃っていて、少し型の古い録音機器もずらりと用意されている。

「ほんつと苦労したよ、こんな田舎でこれだけ集めんのはさ。中古だけで全部良いもんだぜ」

上機嫌な様子で自慢げに話しだす圍。

「でさ、やってくれんの？ポーカー」

圍はふと鋭い視線を投げ掛ける。

「えつと……」

歌うことは好きだし、この楽器も気になる。

「体験で参加してみる、とかどうですか？」

居心地が悪ければすぐやめて、また勉強をしまくれれば良いのだから。

「よっしゃ！じゃあ、早速合わせてみようぜ」

さつさとキーボードをセッティングし、準備万端な圍。

芳もいそいそとギターのチューニングをし出す。

彩音は緊張しながら、少しずつマイクに近付いていく。

マイクの線は既に繋がっているようだったので、スイッチを入れてみる。

プツ……

一瞬電子音がし、マイクの電源が入る。

「あ……」

試しに声を出す。教室（“スタジオ”）中に音が響く。いや外の森にも。

「なんか良い曲ねえ？ 芳、作ってなかった？」

「ああ…」

ガサガサとポストンバックから出された楽譜。

「一応持ってきた」

落ち着いた声とは裏腹に、芳の顔は微かに紅潮している。

もしかしたら彼も表情に感情が出ないのかもしれない。

「ほら」

芳から楽譜を受け取った圍は、彩音にもコピーを手渡す。

芳直筆の、ざかざかと書かれたそれは一見荒っぽく見えるが愛情が込められているのが伝わるものだった。

「んじゃーめぐら、適当に伴奏合わせるから、彩音はそれ歌って。

歌詞は適当で良いから」

「うん、わかった」

彩音は静かに深呼吸をする。目を瞑り、自分を落ち着かせる。

「いいよ…」

用意が出来た彩音は、皆にそれを伝える。

「俺も」

「んっ」

他の二人も同意する。

前奏をキーボードで弾き出す。

アンダンテ（ゆっくりと歩くような速さ）の曲。

心地良いリズム。芳はこんな素晴らしい曲を書けるんだ、と少なからず彩音は感心した。

真夏の夢の中 眠れる君を見た

心 ふんわりと飛んで シャボン玉のように消えた

少し切ないね と呟く君の横顔を見て

余計 胸がきゅんと締め付けられるようにつめいた

今から逢いに行くよ  
例え果てなき扉の向こうでも  
後ろ振り向かずに ただ進めば良いから

曲が終わる。

じんと余韻が立ち込める。彩音は生のバンドの凄さを初めて知り、感動した。

「おいつ、彩音。今の歌詞即興で考えたのかよ?!」

興奮した顔で圍が彩音に近付く。

「あ…うん。なんとなく雰囲気で、だけど。もう、あんまり内容覚えてないし」

「それでもすごいよ！てか、めぐは覚えてる。今度録音もしような  
っ」

楽しかった。

一人で歌を歌うよりもすごく。

きつとこのメンバーだから、というのもあるのだろうが、圍のキーボード、芳のギター、そして自分の歌が混ざりあうことでこんなにも迫力が出るとは思わなかった。

また明日、と挨拶をし、別れた。明日もこんな気分になれるのだと心を軽くしたまま。

o p . 5 初めての喜び（後書き）

やっと歌うことが出来ました！これから徐々に話が動いていくでしょう。（なんだか他人事ですが（笑））

色々問題もありますし、焦らず解決して行きたいですね。

## op・6 小さな変化

「彩音ちゃん聞いてえ〜っ！」

家に帰ると玄関に澄海が飛んできた。

「…なに」

突然でうつすら困った彩音は、無表情のまま応える。

「あのねっ、今日川に行ってたら、すごいきれえ〜な音楽が流れて来たの！友達とビツクリしながら聴いてたの！！」

とてつもなく嫌な予感がする彩音は尋ねてみた。

「川って近くに森とか学校とかある？」

「うんっ。中学校があるよ。彩音ちゃんも通うよっ」

予感的中。

防音になっていないスタジオで思う存分歌ったのだから、周りに聞こえないわけがない。

辺りは森だから音を吸収してはくれるが、それでも近くの川にいた澄海達はハッキリと耳にしたことだろう。

知らないふりも出来る。

後にバレても気付かなかった振りを突き通す自信もある。

でも誤魔化すのは面倒だし、隠すことでもないと考えた彩音は、澄海に伝えることにした。

「それ、多分私だと思う」

笑顔にする。それを聞くと澄海は、

「ええ?!ほんとっ?澄海、感動した程だよ。どこで誰と歌ってたの?」

すぐに質問攻めにする。彩音は一つ一つ、ゆっくりと答えた。

「本当だよ。その中学校で、芳:君と、圍:ちゃん?とだよ」

結局、芳と圍の名前を呼ばなかったことに気付く。

「芳君と圍ちゃんって同じクラスの……あの?そうだったんだあ……。なんでそんなことになったの?」

澄海の“あの”という言葉に引つ掛かりながらも、

「私が一人でいたら、芳君が話しかけて来て、一緒にバンドの練習することになったんだ」

「ええっ、あの無口で有名な芳君があ？ 凄いな、思い切ったコトするんだあー」

心底意外だというように、驚きの声をあげる澄海。

「あ…それ、圍ちゃんも言ってた。人見知りなのに、って」

彩音はあまり人のことを話し過ぎるのは良くないと思い、ここで話を切る。

「圍ちゃんの方も、気難しいって有名だよ。なんかあ、気にいらないとすぐに怒鳴ったり、居なくなっちゃったりするって」

確かに、気の短さも持っているように見えたので、へえー、と曖昧な相槌を打つ彩音。

「でも嬉しいなっ。彩音ちゃんがあのと仲良くなったら、澄海も仲良くなれるよね。ずっとずっと、話してみたかったんだあ！」

本当に嬉しそうにはしゃぐ澄海。

彩音は、澄海の心が綺麗なままであることに喜びを感じた。

「うん、きつとなれるよ。明日も練習しに行くから私も仲良くなりたいし」

久々に人と仲良くなりたいたと思った。それがとても大切なことだと、初めてわかった。

少しずつ、少しずつ、彩音の心が変化して来ていた。

## o p . 7 練習の始まり

ガラッ

勢い良く音楽室の扉を開ける。圍も芳も、まだ来ていない。

「気合、入れ過ぎたのかな…」

少し恥ずかしい。こんなにも今日という日を待ち望んでいたなんて、自分でも思わなかった。

気を取りなおして、すぐにスタジオに行く。昨日の雰囲気のままの楽器が置かれていた。また歌えるのだと嬉しくなり、興奮しだす。

「まだ来ないよ…」

午前十時。集合は九時半だった筈だ。彩音はもう一時間も待っている。暇なのでキーボードのスイッチを入れ、弾く。

「ドレーミーファースターシーダー」

音程は狂ってないし、声も出る。早く、早く歌いたいと気持ちばかりが焦る。

そして、ふと気付く。

「私、一人で歌ってたんだよね…」

昨日まで、一人で歌うことが大好きで堪らなかったのに、忘れていた。ここならキーボードがあるから適当に音を確認しながら歌うことが出来る。

昔、母親に買ってもらったディズニーの楽譜。初心者の曲から、少し難しい曲が入っているが、彩音は右手だけで弾くのが精一杯だ。バサッ

楽譜を広げ、譜面台に立てかける。慣れない手付きでたどたどしく弾く。

「あっ、指が足りないよ。指遣いとかどうするんだろ…」

ぼそぼそと独り言。

ガラッ

「おはよーっ。って彩音、キーボード弾けないんだ？」

サバサバした喋り方で、明るく笑いながら彩音に近づく圍。

「何々？ふーん、デイズニーかあ…。めぐは『星に願いを』とか弾いたな」

ずけずけと入りこんで来ても、彩音は気にしない。逆にその態度を嬉しいとさえ思っている。

「あの……。一回、弾いてみてくれる？」

おずおずとお願いしてみる。圍は軽く、おっ、と言いきーボードの正面に立つ。

心地良いテンポで曲が流れる。乗ってきた圍は、アドリブを入れまくり、より楽しい音楽へとしていく。

「こんなもんかな。……お、芳、遅いぞ！もう十一時過ぎてる」

音もなく現れた芳に、圍が話しかける。彩音は芳が来たことに気付いていなかった。

「ああ、悪い。母ちゃんが色々手伝わせるもんだから…」

「何ごによごによ言ってるのさ！さっさと始めよう。スコア作って来たんだろう？」

圍は芳の言い訳を遮り、スコアを要求する。

「スコア…？」

耳にした事はあるが、よく知らないので彩音は圍に質問した。

「うん。スコアってのはな、指揮者が持っていたりする、色んなパートの楽譜が一つになったもんさ。日本語だと総譜ってゆうんだ」  
「そうなんだ…」

スコアを見ると、タイトルに『扉の向こう』と書かれていた。

芳は彩音の目をしっかりと見て、こう伝えた。

「彩音が歌った詞を入れてみた。歌詞はちゃんと、考えてもらおう  
と思って」

（私が歌詞を考える…？）

彩音は戸惑った。ただ、零れて行く存在としか見ていなかった詞  
を、どう拾い集めて行けば良いのだろう。

「ふう〜ん。じゃ、ぼちぼち考えてみといてくれよ。さ、合わせよ  
うぜ」

歌詞のことが頭に引っ掛かりながらも、早く歌いたかった彩音は  
即座にマイクを持った。

「あ、ごめん。ギター、チューニングするから…。それと圍、メン  
バーにベースかドラムやれる人入りたい」

芳が少し慌てながら、圍に伝える。

「はあ？なんでさ。どれも芳が出来るだろ」

「いや、俺にはたくさんの手がないから…」

すこし天井を見て、考える圍。

「……あぁっ！そか、一つしか楽器出来ないもんな。ま、曲によつ  
て変えるしかないんじゃない。いきなりメンバー増やしたら不安定に  
なるし、だいたいメンバーになれるヤツなんてそうそう見つからな  
いだろうさ」

「だから、頭に入れておいて欲しい。今すぐじゃない」

ぺらぺら喋る圍を声の低さで抑えるかのように、短い言葉で応え、  
チューニングを終わらせる芳。

「はいはい。じゃ、始めるか」

彩音は圍と芳の遠慮の無い会話に憧れながら、歌を歌い始めた。

スツキリと響くその歌声は、青い空に吸いこまれて行った。

残りの夏休みは、毎日毎日学校に行つて歌を歌つた。彩音にとつて夢中になれるものがあることがとても幸せで、満ちたりていた。

(…笑顔……)

でも彩音の偽りの笑顔だけは毎日そこにいた。心から楽しんでいても顔はそうなるだけで、言葉だつてなんとなく尻つぼみで単発的なものしか出てこない。

「よし、明日は始業式だしこんくらいでやめとくか」  
午後四時。いつもは夕飯まで帰らないというのに。

「そうだな。まだ宿題も残つてる」  
思い出したように芳も言い、テキパキと片付け始める。

(まだ歌っていたいよ…。宿題なんてとづくに終わってるのに…)  
彩音はバンドに明け暮れながらもあの問題集はしっかりと終わらせ、『英語文法1 / 100問・高校受験版』も後半に差し掛かっていた。

宿題は簡単だったので二日で終わらせてしまっていた。

でもここは皆に合わせ、帰ることにした。

明日からの学校は、少なからず緊張するものだから。

「彩音ちゃん、明日圍ちゃんと芳君に澄海のこと紹介してくれる？」  
頬を薄ピンクに染めながら目をきらきらと輝かせ、澄海が彩音に話しかける。

「あ、わかった。時間があつたら一緒に話してみよ」  
美味しい取れ立ての刺身を食卓で囲みながらの夕食。自然と会話

も弾む。

「やったあ、嬉しい！いつか音楽もお客さんとして聴かせてねっ」  
澄海は屈託のない可愛らしい笑顔を向ける。

彩音も同じように微笑むし、実際にそれは傍目から見れば普通の笑顔なのだが、彩音の思う本当の笑顔ではなかった。

“本当の笑顔”って何？

そんな思いが彩音の頭をよぎる。

この笑い方が筋肉反射のように定着してしまった今、これが自分の笑顔なのではないか、とも思う。

でも…違和感がある。

こんな人間が歌っても人の心を動かせる程のものになるわけがない。  
早く、早く笑顔を手に入れたい。

それが今の彩音の願い。

o p . 8 本当の笑顔（後書き）

『ムジカ』は音楽の意味です。評価やアドバイスなどありましたら、どうぞよろしくお願いします。読んでくださって有り難うございます。

「おはよっ、この子が彩音ちゃんだよお」

「ああ、この子が噂の」

「確かにべっぴんさん！」

新学期。クラス中の生徒が転校生の周りに集まった。中学二年生のクラスは彩音を含めて六人で、三年生は園と芳を含めた三人だけだった。一年生は二人しかいない。

「ああ、転校生来たんか。覚えてるか？砂浜で会ったじゃろ」

何弁と言えば良いのかわからない独特の、のんびりした喋り方の男の子。

「あつ、ええと……健太君？」

ここに来た初日に、砂浜で会った土屋健太。あのときはなまっっていると思わなかった。ただなんとなく特徴のある話し方だとは思ってたが。

彩音は新しいクラスにすぐ馴染むことが出来た。普通の友達として、本当の自分を出さなくて良いのなら簡単なこと。いつものようにただ笑っていればよいのだから。ありのままの自分を受け入れて欲しい、と欲張りな気持ちを持つと、口数の少ない怖じ気付いた子のようにになってしまう。

だからバンド仲間とははっきりと喋ることが出来ないのだ。

「私の従姉妹の、澄海です」

放課後、音楽室で澄海を紹介する彩音。

「初めまして、澄海ですつ。皆とずっとお話したかった人ですつ」

脳天気明るく自己紹介する澄海を見て園は、

「ふうん、よろしく」

大して興味が無いのか、素っ気なく返事する。芳も大きく強い瞳でじっと見るだけ。

「私は今澄海の家に住まわせてもらってるの。本当にいい子だからすぐ仲良くなれると思う」

一息で一気に話す。あまり長い文で話したことがないから、緊張した。

「ふうん…じゃ、練習始めよーぜ」

いつもの明るく圍からは想像出来ない冷たさ。

“ 気に入らないとすぐに怒鳴ったり、居なくなっちゃったりするんだって” 。

彩音の脳裏に、澄海が言った言葉が蘇る。でも、それと同時に思う。

澄海は私でも好きだと思っ優しい子だから、仲良くなれる。

最初は煩わしいと思った。頑丈に建てた筈の壁を、見えないのか何も感じずに乗り越えてくる彼女に苛立ちや焦りを感じた。それを認められるようになったのは、きつと、圍と芳、そしてバンドのお蔭なのだと思う。

（私を少しだけでも前向きにさせてくれた二つのものが、繋がらないわけじゃないじゃない）

体中から湧き出てくる自信。こんな感覚は初めてのこと。

明るい未来が朧ながらも浮かんできた。

o p . 9 学校の友達（後書き）

やっと新学期の回になりましたね。世間ではもうすぐ夏休みに入ろうというところですが。栗山は今年は何回浴衣を着られるかしら、なんて浮き足立っています。約二ヶ月の長いお休みなので、小説もばんばん更新させていただきたいと思います。

「 園 : お前、あの子のこと嫌いかな? 」

帰り道、芳が問いかける。二人の家は大きな畑を挟んで隣同士なのだ。

「 なんて 」

ぶっきらぼうに返事をする。

「 なんて、そんなことを訊く? 」

もう一度ゆっくり尋ね、芳の方に振り返る。

「 そんなオーラが出てたから 」

躊躇いもなくあっさりと告げる芳に、ふっと吐息を溢す園。

「 わかったよ。別に態度に出すつもりなんかなかったんだけどさ。

あーあ…これじゃ彩音にも伝わってるか 」

彩音は人の感情に、きつと敏感だろうから。そんな風にぽつりと思う。

「 なんて? 」

今度は芳が尋ねる番だ。

「 なんてって…。芳わかってんだろ? めぐはああいうタイプの人間が好きじゃないって 」

「 “ ああいうタイプ ” って? 」

質問し続ける。いつもはこんなにしつこく訊いたりしない人なのに。

「 ……なんだ、芳はあいつが好きなのか 」

「 そんなことはない 」

「 やめとけやめとけ、芳には無理。いい子でいたいようなヤツがお前に振り向くわけがない 」

はあ…、と芳は溜め息を付く。話が望んでいない方向へと進んでいるからだ。

「 そうじゃないだろう。さっさと質問の返事をしろ 」

少し苛つく芳を見て、諦めたように圍が話しだす。

「だから…。いい子だからだよ。むしろが走る」

「いい子って…それは彩音もだろう」

皆目わからないという顔をする芳。

「鈍いなあ。この鈍男くんがっ」

笑いながら冗談を言い、

「あ、じゃ、めぐは帰るから。またなー」

さっさと家に入ってしまった。

「はあ…。一体なんなんだ」

芳には圍の考えていることがわからなかった。

いい子だから嫌い、という意味。でも彩音は良いという意味。

芳には、澄海は好印象だった。

前から元気に明るく友達と喋っているところは何度も見掛けていたし、近所の評判も頗るおとこ良いからだ。

それに 彩音の友達だ。

彼女が全面に好きだという気持ちを表していたから、本当にいい子なのだろうと思う。

造られた“いい子”ではないと思う。きっと圍は何か思い違いをしているんだろう。

そんなことをぼんやりと考えながら、芳も家に帰って行った。

o p . i o “ いい子 ” (後書き)

圍と芳の会話、なんだか好きです。昔から知っている者同士の遠慮のなさや、はぐらかたななかがしっくりくるのかもしみません。もしよろしかったら、感想やアドバイスなどよろしく願います。読んでくださって有り難うございました。

「彩音、聞いて驚け！二ヶ月後に学校でライブすんぞ！」  
はしゃぐ圍が、彩音が音楽室に入るなり伝える。

「二ヶ月後…？」

何かなかったかな、二ヶ月後って。

ふと考える彩音だが、初めてライブをすることが出来るのだと喜んだ。

「校長が許可してくれた」

芳も今までにない程にこにこ笑い、ギターのチューニングをしている。

「へえ…校長先生がねえ…」

ここの校長は、堅物のような風貌をしているが、実は音楽が好きなのだそうだ。

クラシック、ジャズ、ボサノバ、ラテン、ヒップホップ ジャ  
ンルにこだわらず気に入ったものならなんでも聞くらしい。

「客は物珍しさに入るだろうしさ、曲は三曲程度やれるって。今一  
曲決まってるし、他にも芳が良い曲書いてくれてる」

ふと真剣な表情になった圍が、

「で、彩音？歌詞はどうなってる？」

正直言って、まだ一つしか出来ていない。

「いつも練習してる歌は…もう決定で良いんじゃないかな…？」  
恐る恐る伝える。

「真夏の夢の中 眠れる君を見た

心 ふんわりと飛んで シャボン玉のように消えた  
少し切ないね と呟く君の横顔を見て

余計 胸がきゅんと締め付けられるようにうめいた

今から逢いに行くよ

例え果てなき扉の向こうでも  
後ろ振り向かずに ただ進めば良いから

出会ってから ずっと 言いたいことがある  
何度も遠回りして 結局口 つぐむけれど  
伝えれば きつと 思いも通じるかな  
臆病な自分を 壊す何かになるかな  
今だからこそ

これから逢いに行くよ

例え深い沼の中でも

希望失わずに ただ向かえば良いから

…だよな？」

譜面を見ながら確認する圍。

「うん、もう覚えたし…」

自信なさげな彩音を見て、芳が、

「彩音、あまり悩まなくて良い。俺の主旋律だけのデモテープ聴いてイメージで書けば良いから。もし浮かばなければ皆で考えよう」「  
思わぬ芳の優しい言葉に彩音は泣きそうになる。

「有り難う…」

ぐつと堪えて笑顔になる彩音。

「あぁっ！」

突然圍が大声を出し、彩音の顔を覗き込む。

「えっ…？」

訳が分からず硬直する彩音に向かって、

「良かったじゃん」

と、にかつと笑いながら頭を軽く叩く。

「なっ、何…」

“何が？”と言おうとした彩音だが、ふと気付く。

（私今、笑った…？）

「何気心配してたんだぜ、めぐも芳も」

完璧な笑顔である筈の偽りの笑顔を芳と圍はすぐに見抜いていた。とても痛々しく見えていた。だが、心を開こうとする姿勢が伝わって来ていたから何も言わなかったのだ。

「やっぱり、笑った方が可愛い」

ぼそりと呟く芳の声を聞いて、また笑う。皆で笑う。

彩音は幸せだった。自分のことをしっかりと分かってくれている友達に出会えたことが、何よりも嬉しかった。望んでいた笑顔も手に入れることが出来た…。

歌と笑顔と友達。

それが今の彩音の、一番大切なもの。

o p . i 1 大切なもの（後書き）

やっと笑顔になりました。本当はもっと感動的というか、盛り上げようかと思っていたのですが、実際は笑うときって一瞬なので敢えてあっさりさせてみました。

「一番大切なもの」が三つもありますけど…その気持ちは皆様わかっていただけるのではないでしょうか。

ここまで読んでくださった方、有り難う御座いました。感想やアドバイスなど、もしよろしければ送ってください。

「どしたの、彩音ちゃん？すごい嬉しそう」

にこにこしながら夕飯を食べる彩音を見て、澄海が尋ねる。

話をする時は笑顔になることはあっても、普段にこにこしているなんて初めてだったからだ。

「えっ、別になんにも…ないよっ」

やっと本当に笑えたの、なんて言えるわけないので誤魔化す。

「そうなんだ？ねえママ、すごく元気だよねえ？」

今度は母親に話を振る。

「澄海、そんなにごちゃごちゃ言うもんじゃないのよ。元気なら良いことなんだから騒がないの」

賑やかな娘に苦笑しながら、おばちゃん　友季子も心の中で澄海と同じことを思った。

「あっ！なんでもなくないんだ」

ふと笑顔の経緯を思い出した彩音は、ライブのことを伝えた。

聞いた途端に澄海と友季子は大はしゃぎ。

「えっ、もしかしてCD出しちゃったり？」

「あら、それならサイン第一号はおばちゃんが良いわ」

「ええっ？澄海に決まってるでしょ、ねえ彩音ちゃんっ」

二人とも本気なのが恐ろしい。

「ちよつと、落ち着いて…っ」

くすっ

思わず吹き出してしまう。こんな経験も初めてのような気がする。

「そうだよママ。学校で演奏するだけでテレビカメラとか来るんじゃないよ？」

いきなり澄海は身を翻して友季子をなだめる。

「え！……いやあね、ママはそれくらい分かっていますよ」

明らかに慌てた友季子だが、隠してそう言う。

正直な性格が災いして嘘なんかつけない様子をかいまみる。

「そういえば彩音ちゃん、いつかに模擬試験があるんだって？都会の方に出なきゃいけないんだったわよね」

いきなり話を変える。意図して話を反らしたのではなく、急に思いついたようだ。

「ああ、そうなんです。後で日程確認してみますね」

彩音が受ける某塾の模試は、全国でとある基準に達している者しか受けられないものなのだ。

これを受ける人イコール、難関高・大へ進んで行く人。そんな構図が容易に浮かび上がる。

「へえ、いいなあー。澄海も新宿とか渋谷行ってお買い物したいよ。いやいや、試験に行くんだって。」

そんな突っ込みを飲み込み、

「何か欲しい物あるの？」  
と尋ねる彩音。

「そうなの。由美が持ってた雑誌に書いてあったインドサンダルなんだけどね、ヒールペたんこで歩き易そうだし、なんとって可愛いのがジャラジャラ付いてるんだもん」

確か、由美というのは同じクラスの女の子で、ふわっとカールした天然パーマがなかなか可愛い、愛嬌のある子のだ。

「インドサンダルって…」

二年程前にもハヤってなかったっけ？何足か買ってもらって、気に入ってた気がする。

今は……もう、何処かの押し入れに詰め込んで来たけど…。

「彩音ちゃん、起きてる？」

ぼおっと思考の渦に立ち入ろうとしていた彩音の顔を、澄海が冗談めかして覗きこむ。

「ごめん、寝てた」

もちろんそんな訳はないのだが、澄海の言葉に合わせ冗談を言う。「あははっ、もう、彩音ちゃんったら喋ってる途中で黙りこむんだ

もん」

そうだった、と思い出す。

「 ええっと、そうそう。インドサンダルって、皮で出来てて指の所にアクセ付いてたりするやつだよね、って言おうとした」

さっきのやりとりを思い出しながら判りきっていることを話す。

「うん、そう。もしお店寄る機会があったら見てもらえらる？お金渡すから！あんまり高いのは買えないけど」

きつと彩音ちゃんは趣味良いだろうし、とにこやかに付け加える。  
「時間あったら、ね」

彩音も笑って、友季子のそろそろ片付けましようという声を合図に食事が終わった。

o p . 1 2 (後書き)

今の彩音には、世界がキラキラして見えるんだろっな、青春だわ。  
なんて思いながら書いています。

え……。

嘘、でしょ。

待って、お願いだから落ち着いて、私。

…だめだあ……。

見間違いないじゃ、ない。

「彩音：歌詞がどれも暗いんですけど」

圍がルーズリーフに書かれた四本の彩音の詞を見て、眉を潜めながら言う。

「いつも好きだったのに

もうさよならしなきゃ

あたしには やっぱり

あなたとえられる 資格がないの

…なんかあった？」

一瞬身じろぐ彩音を見て、“何かがあった”ことを実感する圍。

何なんだよやっと心を開いたかと思っただのに。問題が起きたんだらうけどさ……。

なんとなく釈然としない圍はぶすつとした表情をして、

「芳の曲聴いたか？希望に満ち溢れた明るい曲と、甘い雰囲気の曲だったと思うけど？」

圍の苛々が伝わる。

彩音も早く言わなければいけないことは分かっているのだが、結局どうすれば良いか判断が付かないのだ。

「うん、そっだよね…」

あの素敵な曲に合う詞を書きたい。どれも彩音の声が一番引き立つ旋律なのだ。

「彩音は音域が広いから、遠慮なしに好きな曲が書けた」

暖かい目で彩音を包んでくれる、芳の存在。

「うん 有り難う」

期待を裏切りたくはないんだ。

この場所を失いたくはないんだ。

でも……でも、自分のここに来た目的はあくまで“集中して受験勉強をする”こと。

「ああもう、焦れたいなあ！何かめぐ達に言わなきゃいけないことがあんだろ？ぱぱっと済ませろって」

音楽室の木の椅子にどっかと座って話を促す。

彩音は意を決して話し出す。

「二ヶ月後のライブの日…模試が入ってた」

言い終えて下唇を噛み締める。

「…模試？」

きよとんとする圍。芳はまだ何も言わない。

「模試なんて何度もあるんだろ？あービックリした、もっと深刻なのかと思ったよ」

椅子に座り直し、安堵の息を吐く圍。

「ちっ…違うの、何度もなんてないの」

「ん？」

ぱっちりした目を開いて彩音を見上げる。

「ペティキュラー模試って言って、受けるのにも資格がいるような模試なの」

ぴくつと圍の口元が動き、ひきつる。

「…それで？」

彩音にちゃんと話させようと、敢えて口を挟まずに小さく声を出す。

「それ…で、私はどうしたら良いか迷ってるの」  
ガタンッ

その言葉を聞いて圍が荒々しく立ち上がった。

「は？迷ってるじゃなくて、もう決まってるんだろ。だから悪いと思

って言えないんだ」

そうはつきり言われて、彩音は凶星だと思った。迷ってるんじゃない、心はもう決まってる。

でもバンドが好きだから無責任な嫌われるようなことはしたくないのだ。

「うん…」

小頷きそのままうつむく。

「なんで？一流高の奨学金を目指してまで、なんでそんなに受験したいんだ？どんなに大きな模試だって、次があるじゃないか。模試受けなくたって勉強続ければ関係ないだろ？」

きつい口調で巻くしたてながら、必死に引き留めようとする。

「その模試だけをずっと受けてるから、今回逃したら三年になってからしかないの…」

こう話しながら、より模試を受けなければならぬという意識が強まった。

「ああ…そういうえば彩音、まだ体験なんだっけね」

芳に連れられてここに来た日、そういうえばバンドを体験するということ仲間に入ったのだ。

そしてそのまま歌っていたが、本当のメンバーになるとの返事をしていたなかった。

「成程、まだちゃんとしたメンバーじゃないもんな。分かった、もういい。めぐが弾き語りする」

ぼそつと最初からそうすりゃ良かったと呟く圍。

彩音の胸がじわじわと締め付けられて行く。

自分はメンバーなんかじゃなかった。

思い上がっていただけだった。

そして今、自分からこの居心地の良い場所を手放してしまったのだ。でもどうしても彩音は、模試を受けないわけにはいかない。

経済的な問題もあるし、何より“あの人”を見返さなければならぬいから…。

o p . 1 3 ( 後 書 き )

雲行が怪しくなって参りました。あらすじを最後の一文だけ書き足しました。

「彩音ちゃあん、芳君来たよう！」

階段の下から大きな声で部屋にいる彩音を呼ぶ澄海。

「よ…芳君？」

ぼつりと独り言を洩らしながら立ち上がり、階下へ向かう。紛れもなく芳が玄関に立っている。

「えーと…」

いらつしゃい、と声を掛ければ良いのか戸惑う彩音。

芳も緊張によつて少し顔が硬くなっている。

「ちよつと、話があつて来た」

外で話そう、と首をしゃくって振り向き、戸に手をかける芳。

彩音は慌てて階段を降りきり、小走りに背中を追い掛ける。

あの会話がされてから一日経った夜。

学校では狭い校舎だから何度も出会うのだが、圍は堅く口を閉じ、強く前を見据えるだけだった。

彩音も目を合わせる事が出来なくて廊下ではずっとうつむいていた。

芳はその二人の状態を見てどちらに対してもいたたまれなくなったのだ。

「あいな」

澄海の家の前道路をゆっくりと学校の方向へ歩く芳。

彩音はつつかけを足に滑らせ、急いで追った。

まだ七時だが街頭のまばらなここでは暗闇に包まれる。

星と月が二人をほんのりと包み、蝉が遠くで穏やかに鳴いている。

「彩音は本当に歌を歌わないのか」

静かに尋ねる芳。

「歌いたいけど…ただの趣味、だし…」

自分で言いながらも胸が締め付けられる。

ただの趣味。そう、そんな存在でしかないのだと思い知る。

「 どうしてそう思い込む。彩音は趣味のレベルを越えている」「  
そんなことない。それは芳君だよ」

「彩音、本気か」

少し語気を強くして鋭く訊く。

「うん…」

後ろ髪を引かれる思いを持ちながら小さく頷く。

「 どうして…。そんなにも、そんなにも魂は叫んでいるのに」「  
魂が……？」

芳の熱を持った声に心が揺さぶらされる。涙が溢れ出しそうになる。

やだ、泣かない。

泣くわけにはいかないと彩音は思う。

泣いたらもう歩けなくなるから。歌いたいと…思ってしまうから。

「あ…たしは、受験をするの。勉強に集中する為にここに来たんだ  
もの」

目的を見失ってはいけないんだ、と自分に言い聞かせる。

今まで何を思って生きて来たのか、忘れてはいけないから。

「本気なんだな」

彩音の真意を読み取る為にじっと目を見つめる芳。

暗がりの中でもその瞳の強さは健在で、逆に引き立ってさえ見える。

「うん、本気」

彩音は歌への想いを断ち切るかのようにハッキリと告げる。

「分かった、模試頑張れ」

「ありがとう」

彩音ちゃんがおかしいよ…。圍ちゃんと口きかないなんてすっごく変！圍ちゃんも変！

流石の澄海も、何週間もお互いの存在に気付かない振りをし続ける彩音と圍に違和感を感じていた。

澄海は一人で考え込むタイプではなく、疑問はすぐに質問をして解決していく。

だが今回は重苦しい雰囲気を身に纏っている彩音に訊くわけにはいかないし、圍は澄海を見ると冷たい眼差しを送ってくる。

だがこれ以上自分で推理しても何もわからないであろうと考えた澄海は、二人の共通点でもある芳に話を訊くことに決めた。

「芳君っ、ちよつと来てっ」

夕焼け空を見上げながら一人で下校する芳を見掛けた澄海は、慌てて駆け寄った。

「うわ！」

いつもの芳とは思えない、大声。

澄海は突然のことできよとんとする。

「わ…悪い、つい」

バツが悪そうに言い訳をする芳を見て、澄海はなんだか楽しくなってきた。

「うっん、澄海こそ驚かしてごめんね」

二人は森を右手に見ながら通学路をゆっくりと歩いて行く。

「で、話…？」

先程の芳のように、真っ赤な空を見上げて楽しそうにしている澄海に、話を促す。

「あっ！そうなの…澄海、ずっと気になってることあって。ずっとって言うっても一週間くらいだけどね」

話を思い出した澄海は、真剣に芳の目を見つめる。

「最近彩音ちゃんと圍ちゃんの様子が、不自然な気がするの。芳君は、何か知ってる？ 教えてもらえないかな…」

一瞬どう伝えれば良いか躊躇った芳だが、ありのままを話すことにした。澄海なら信頼出来ると思っっているのだ。

「学校でやるライブ知ってるか？」

「うんっ、楽しみにしてるよ」

満開の花のような明るい笑顔に、芳の鼓動が高まる。

「それが 中止になるかもしれない」

気まずそうに話す芳を見て澄海は困惑する。

「どうして…？」

笑顔は萎み、今は少し泣きそうな顔をしている。

「彩音の模試がかぶったらしい」

「……もし？」

一瞬わけが解らないといったとぼけた表情をした澄海だが、はっと何かを思い出したように真面目な顔になった。

「そっか、あの都心でやる模試のことだね、きつと。分かった… 芳君ありがと」

哀しそうに笑ってぱたぱたと走って行った。

途中で澄海はくるりと振り向いて、

「もし彩音ちゃんが出れなくなったら二人で出来るよっ！」

と明るい声を残していった。

「受験で何かあるのか…」

澄海を感じから深い理由があるであろうことを察した芳だが、それ以上は何も分からなかった。

「皆…ごめんね…」

彩音は勉強の休憩時間にはいつも芳の音楽を聞いた。

もう芳は自分のことなど愛想を付かしているかもしれない。

それでもせめて、彼の音楽の傍にいたいと思ったのだ。

そうして芳のことを考えながら聴いていると、たくさん思いが浮かび上がってくる。

何度も何度も詞を書く彩音。

もう自分のそれなど必要とされていないことは分かっている。

それでも。

それでも書きたいのだ。それが自分と歌を繋ぐ最後のものだと思っているから。

「出来たあ………」

ほうー、と安堵の息を洩らし、紙に書いた詞を眺める。

「でもこれ、どうしようかな………」

今更誰に見せられるというのか。裏切り者の詞を使うお人好しが何処にいる。

仕方ない、一人で勝手に歌ってよう。

彩音は最近、また最初の頃によく行っていた砂浜へ行くようになった。

やはりそこで歌うのが好きだし、健太なんかも姿を見せることはなかったから。

「貴方に 伝えたい

思いが 後から後から

流れる…

好きだとか 愛してるとか

今は 分からないけど

いつだって 貴方  
傍にいてくれたから  
素直じゃない あたしを  
真っ直ぐな瞳で  
包んでくれたから

また見付だして  
迷子の仔猫のような  
あたしを…  
蹲り 動けずにいる  
弱虫なあたしを  
今なら まだ行けるから  
曇りのない空の果てまで

今飛んで行きたい 貴方の元へ」

気持ちいいな、思いきり歌歌うのって。

思わず笑顔綻ぶ彩音。

いつかのように砂浜にぺたんこ腰をおろす。  
甘い旋律の芳の曲に彩音の心のたけをぶちまけたかのような情熱的  
な声が入り混じる。その溶け具合いは絶妙だ。

「勉強しなきゃ」

思いきり立ち上がり、パンツと砂を払う。

模試は明後日。明日にはここを出て都心で一泊しなければ。

とにかく今は、模試のことだけを考えよう。

「彩音ちゅわあくん、行ってらっしゃあい！」

能天気な冗談混じりの声で、明るく彩音を送り出す澄海。

澄海の家小さな最寄り駅から新幹線が出ている遠くの駅まで電車に乗る。

それだけで一時間かかるといふのだから、大したものだ。

「うん、わざわざ駅までありがとね」

最寄りとは言っても徒歩で三十分の距離がある。

木造で、改札は駅員が一人でまかなっているおんぼろな駅なのだ。

「ううん。彩音ちゃんは模試頑張って、お買い物楽しんでね」

屈託の無い笑顔。

「そうだね、ありがとう」

「はいはい。それじゃあまた明後日」

学校を一日休む必要は無かったのだが、どうせならのんびりしなさいと友季子が勧めたのだ。

「あつ…澄海ちゃんにお願いしても良い？」

なかなか言い出せなかったのだが、思い切って話す彩音。

「なあに？」

澄海はにこやかに答える。

「うん。芳君に、これを渡してもらえないかな」

おずおずと差し出した手には二枚のルーブスリーブが挟まれていた。

「良いよ、お手紙？」

「ん…そんなところかな」

繕った笑顔を見せ、彩音は電車に乗り込んだ。

「行ってらっしゃい」

ひらひらと手を振りながら、澄海は手渡された紙のことが気になつて仕方なかった。

「こんにちはっ、芳君いますか？」

芳の家の玄関で芳を呼び出す。

預かり物したのだから早い方が良いだろうと駅から直接向かった。

「あ……」

口を半開きにしたまま、奥の居間から姿を現す芳。

「あのね、今日彩音ちゃんは都心に向かったの。芳君にこれ渡して欲しいって言うてたから……はい、どうぞ」

両手でルーズリーフを渡す澄海。芳は何か見当もつかないまま受け取る。

カサ……

二つ折りにされたそれを開くと、歌詞が書かれていた。ちゃんと二曲分。

「お手紙って言うてたよ」

小さく付け加える。

「手紙……。そうだな、手紙だ」

じつと紙に見入り、真剣な顔をする。

まるで澄海が存在を忘れているかのようだ。

「うん、最高の手紙だ。持って来てくれてありがとう」

パツと顔を上げ、満面の笑みを澄海に向ける芳。

それを見て澄海は、とっさにうつむいた。

芳のそれが眩しすぎたというのもあるが、何より自分に向けられていても自分に対してのものではないことがわかるからだ。

「澄海……？」

いきなり目を反らされ、戸惑う。澄海も良かったね、と笑ってくれると思ったのだ。

「どうした……？暑かったから具合悪いのか。部屋上がったけ」

微かに細かく首を横にふって、拒絶する。

「ごめ……っ。あたしどうしたんだろ……」

自分でも、この気持ちのもやもやとした渦の正体が分からない。

芳が見たこともない良い笑顔でいたことを、とても嬉しいと思っているのに。

澄海は顔を上げずに、さよならと告げ、芳の家を出ていった。

「澄海！澄海っ！」

出来るだけ大きな声で叫ぶ。

がたいの良い芳から出る声は、どこまでも届きそうな程で、まるで吠えているようだった。

そんな声で名前を呼ばれては恥ずかしくて敵わない。

慌てて後ろを振り返って立ち止まり、

「やめてっ」

と顔を赤らませながら叫んだ。

「ごめん…つい。どうした、澄海らしくない」

大股で近付いてくる芳は息切れもせず涼しい顔をしている。

「顔も赤いし熱中症になるぞ。上がって行って」

本気で心配している大きな瞳。

澄海は、顔が赤いのは別の理由なのにと思いながらも従った。

「お邪魔します」

またさっきの家に戻り、敷居をまたぐ。

「ちよつと芳、あんた恥ずかしいねえ。あんな風に名前を呼ぶもん

じゃありませんよ」

悪かったねえ、と澄海にも話しかける芳の祖母、カネ。

誰にも聞かれていないだろうと思っていた澄海は、再び顔を赤らめた。

「ばあちゃん、体調悪いみたいだからさ、休ませてやってよ」

澄海のことをカネに任せ、自分は台所に向かう。

カランと耳に心地良い音が何度かして、お盆を持った芳が居間に戻ってきた。

「これな、ばあちゃん特製の麦茶なんだ。すつきりする」

ガラスのコップに麦茶を注ぎ、澄海の前に置く。

「あ…ありがとう」

最近は芳や圍と仲良くなった澄海だが、ここまで優しくしてくれるのは初めてのことだった。

「ゆっくりで良いからお飲み。こっ暑くっちゃすぐ脱水しちゃうからねえ」

にこにこ笑うカネは、もう八十をとくに過ぎているというのに若々しい。

芳と二人きりの家族だから簡単にはくたばらないと豪語しているらしい。

こくつと一口飲み、味わってみる。

氷でひんやりと冷えた麦茶はすきつと喉元を通りすぎ、まるやかだ。

「すごい…美味しいです」

市販の麦茶はもつと棘っぽい味だと思う。

「愛情かけた麦に、隠し味をブレンドしているからねえ。そんじょそこの物とは違うはずさあ」

満足そうに笑いながら説明をする。

「ふあー、美味しかったっ。生き返りました」

確かに脱水していたのかも、と澄海は思う。

朝起きた時に一杯の紅茶を飲んだきりだったのだ。

「うん、良かった。俺も飲もう」

澄海のコップにも注ぎ足し、カネには氷を入れずに注ぐ。

「あ、そうだ。今日もバンドの練習するけど来るか？」

何ともなしに澄海を誘う。

「えっ、行って良いのっ?!」

仲良くなったとは言え、圍とは見えない壁が立ちはだかっているし、練習を見に行くことは無かった。

「ああ、これも圍に見せなきゃいけないしな」

ぴらっと彩音からのルーズリーフを片手で出す。

「え？それはお手紙でしょ…?」

手紙を人に見せるなんていけないことなのに。

一瞬澄海は芳を咎めそうになった。

「いや、歌詞」

ほら、と澄海に見せる。

「貴方に伝えたい想いが……。ほんとだ、ラブレターかと思った」

冗談で芳に伝え、ルーズリーフを返す。

自分でそう言ってから、気付く。

ラブレター……？

「ああ、そうだな。俺の曲にぴたりと合う」

芳は何も感じずに彩音の才能を喜んだ。

「俺と圍で色々考えたがなかなか上手くいかなかった。これで明日はライブが出来る」

嬉しそうな芳。

「そうだね、めぐちゃんも歌上手いもんっ」

ライブが見られる、そのことはとても嬉しい。

澄海は芳たちにライブをやってほしいと何度も励まし、それで圍が歌う気になったのだから。

「じゃあそろそろ学校に行くか」

立ち上がり、コップと麦茶を素早く片付ける芳。

「行ってらっしゃい。今日の晩御飯は鰯の煮付けだからね」

玄関で力ネがにこやかに送り、芳と澄海は学校へ向かった。

模擬試験会場近くのホテルに着いた彩音は、ほっと一息ついた。

明日が模試なのだから、今日は今までで不安要素のあるところを軽くおさらいする程度。

学校の定期テストではないのだから、前日に慌てて勉強しても意味がないことくらい承知している。

夕飯を食べ終って、ふと思い出す。

澄海は芳に歌詞を渡してくれただろうか、それならどんな表情をしたのだろうか、と。

きつと彩音がいなくてもライブは出来るだろうし、歌詞も自分達で用意しているだろう。

それでもまだ、甘えがある。もしかしたら彩音の詞を使ってくれるのではないか。

「身勝手なやつ」

自嘲気味にぼつりと口に出す。往生際が悪いと思うし、自分勝手な考えだとも思う。

そんな自分がいやでいやで仕方がない。

いつの間にかそんな考えをする人になってしまったのだろう。

あそこに行く前は自分を理解し、考え込むこともなかったのに。

結局居心地の良い場所に居ると自分は駄目になる。そんな不安定な心を持っているのだ。

だが、彩音は気持ちを瞬時に切り換えた。

自分が此処に居るのはごちゃごちゃと悩むためなんかではないのだから。

大浴場に向かい、リラックスする。

今日のためにやることは全部やった。明日、集中するだけ。

終わって芳に会ったら言いたいことがあるんだ。

「ママ、聞いてっ」

パタパタと台所にとびこむ澄海。

「あら、今帰って来たの？おかえり」

「うんっ。ただいまっ」

いつもよりもにこやかに　というよりにやけながら喋る澄海。

「アンタどうしたの？大層良いことがあったでしょう」

つられて嬉しそうにお鍋をかき混ぜる友季子。

「うんっ。今日、バンドの練習見に行ったんだよ。芳くんがすっ

ごく優しくって…」

ほう…、と頬を薄い桃色に染めながら吐息を洩らす。

「芳君はご両親が交通事故で亡くなってからずっと、お祖母ちゃん  
と二人なのよ。それまではここにこ笑っている子だったから皆で心  
配したものだわ」

ぐつぐつ煮える鍋。

「澄海その話よく知らない…。あたし芳くんのこと好きになっちゃ  
ったよ？ママ…」

少し驚いて隣に居る澄海の顔を見ると、いつになく真剣な本気の  
眼差しを持っていた。

「そう…いいわ、教えてあげる」

ぐつぐつ…

鍋の心地よい音と湯気に包まれて、友季子は語り始めた。

o p . i 9 (後書き)

ムジカのジャンルは、恋愛です。忘れかけていた読者様、やっとこ  
れからなのでお待ちください (<人>)

晴れた日だった。

抜けるような青い空にターコイズブルーの透き通った海。

太陽は鋭く、そして暖かく世界を照らしていた。

「まだ父ちゃんと母ちゃん帰って来ないの？オレ早く泳ぎたいよ」

家の縁側に座り、足をばたばたとつまらなそうに動かす。

「よっちゃん、もうそろそろ帰るだろうからいい子に待ってなさい。ほら、そんな悪い顔しないの」

ぶつつと頬を膨らまし口をタコのように尖らせてカネを睨む七歳の芳の頭をぼんと叩く。

「ちえ。オレ一人だって泳げるよ。めぐと健太はもう遊んでんのにさ」

お前の親はカホゴだな、ってめぐにはからかわれるんだ。

「ばあちゃん、かほごって何？」

何故バカにされるのか知りたくなった芳はカネに尋ねる。

「おや、そんな難しいことを誰に聞いたんだい」

感心したように質問をしかえず。

「めぐだよ。父ちゃんか母ちゃんが見てないと海と川じゃ遊べないって言ったら、笑われた」

ああ…、と納得したような顔をして頷く。

「めぐちゃんは親戚がいなくて健太君の家に住ませてもらっているからね、親がいるよっちゃんを羨ましいと思うのかもしれないね」

「え？健太とめぐは家族だよ」

きらきらと輝く強い光を持つ芳の目が、真っ直ぐにカネを見つめる。

「この子は素直ないい子だとカネは度々思う。」

「めぐちゃんの両親は何処かに行ってしまったのさ。そこで村で一番人の良い土屋の洋とやっちゃんが引き取ったんだよ」

芳は眉間に皺を寄せて思案深げな顔をした。

「父ちゃんと母ちゃんがいないって…寂しいのかな」

そしてぼつりとそう呟き、黙りこんでしまった。

もしオレも父ちゃんと母ちゃんがいなかったら、めぐの気持ち分かるのかな…？

「さあさ、おやつにしようかねえ。ドーナツを揚げたんだよ」

「おっ、ばあちゃん特製だな！」

跳び上がるように立ち上がりここにこ笑う。

「そうだね、ばあちゃんお手製の特製ドーナツさ」

「ややこしいなあ」

けらけら二人で笑って小さな幸せを味わっていた。

……だが。

その後かかってきた電話がそれを壊した。

ほのぼのと笑っていたカネの顔が一瞬にして凍りついた。

何か大変なことが起こったことは子どもながらに分かったと

いうより、子どもだからこそ分かったのかもしれない。

すぐさま病院に向かった。急激に大きな不安がのしかかってくる。

偉そうな先生が悔しそうに唇を噛んでいたこと以外、何も思い出せない。

世界が一瞬にして白黒になった。

光なんてない…蝉の鳴き声も川のせせらぎも消えていった。

“もしオレも父ちゃんと母ちゃんがいなかったら、めぐの気持ち分かるのかな…？”

俺のせいだ。

「ああ〜終わったあ…」

試験終了の合図。問題の解答をもらってすぐに立ち上がり、町へ向かう。

インドサンダル。

今、心の中はそれだけ。

この辺りは物価が安いし良い物が揃っているからきつと見つかるだろう。

芳君と圍ちゃん、それにおばちゃんにも買いたいな。人混みの中で考えを巡らす。

ふと雰囲気の良い雑貨屋が目にとまった。

こついうお店は良いんだよ、大概。なんとなく自信を持って店に入る。

アジア雑貨の店で、可愛いインドサンダルも何足か並んでいる。

澄海の足のサイズは彩音のと変わらなかったなので自分で履いてみる。

何足か試してぴったりのを見つけ、彩音は満足げに微笑む。

澄海のイメージに合うターコイズブルー、白、薄桃のビーズがキラキラと並び、上品な感じもする。

その店では圍へのネックレスと友季子へのバッグも買った。

後は芳だけなのだが趣味がよく分からない為、男性物の店で格好良いTシャツを買っておいた。

ホテルに帰って、部屋で芳の歌を歌う。

考えないようにしていたのだが今日のライブはどうだったのか、やはりとても気になる。明日は皆に会いたい。

「芳くん、めぐちゃん、すごく良かったよ!」

ライブが終わりのんびりしている圍と芳の元に澄海がやって来た。ライブには中学生全員と教師、時間がある大人達など好奇心旺盛な人々が集まり、なかなか賑わった。

「おーありがとー」

呑気な表情で軽く澄海にお礼を言いながら紙パックに入った紅茶を飲む。

「最前列にいたな」

澄海の熱狂ぶりが面白かったらしく、芳はぷっと思出し笑いをする。

「友達も楽しかったって言ってたよ。二人ともデビューしなよっ」  
さらっと楽しそうに言う澄海は本気なようので、圍と芳はぎょっとする。

「アンタさあ、お気楽すぎ。そんな簡単なもんじゃないんだって」  
苦笑する圍はもうすっかり澄海と打ち解けたようだ。

「でも、運もあるじゃない？ 売り込みとかしちやっけてー上手く行けば、どどんって！」

勢いに乗って人気者になるかも、と伝えたい澄海だがどうも言葉が足りない。

「あーはいはい。じゃ、めぐは帰宅します」

澄海に付き合つのが面倒になったのかそそくさと立ち去ろうとする。慌てて澄海は、

「あああ！めぐちゃん待って。訊きたいことがあったりなかったり……」

帰り支度を整えた圍を勢いよく押しながら連れ去っていった。

一人ぼつんと取り残された芳は、二人が仲良くなったことに安堵した。

「あのね、質問があるんだけど……」

学校のすぐ側にある大きな切株の上に座り、澄海は話を切り出した。

「めぐちゃんて、好きな人いるの…かな？」

少し伏し目がちに圍を見る。

「なんだ、恋バナってやつなら興味ないから他の子としな」

「違う違う！えと…ああもう……」

何やら葛藤しているらしい澄海を見て、仕方ないから見守ってやることにする。

「めぐちゃんさあ…芳くんと付き合ってる？」

恐る恐る尋ねる。一瞬でぴんときた圍は、

「あつは。なんだ芳のこと好きなの。物好きだねー」

からかいのネタが出来たと喜ぶ圍と対照的にまだ不安の色を隠せない澄海。

「あ、悪い。芳は幼馴染みってだけだよ。芳は澄海のこといい子だって褒めてたし、脈有りかもな」

「えっ、本当?!澄海がいい子かあー。すっごい嬉しいっ。めぐちゃん有り難うね」

さっきとはうってかわって元気になる。

「アンタ、本当素直だね。見習ってもいいかも」

じゃね、と去って行く圍の背中を見送りながらまだ音楽室にいる芳のことを思う。

脈あり…なのかな？それなら善は急げだよね！。

プラス思考過ぎる澄海は弾みをつけて立ち上がり、校舎へ駆けて行った。

o p . 2 1 明日になれば(後書き)

いつの間にかo p . 2 1。もう暫くお付き合い頂けると嬉しいです。アドバイスや感想など、何かありましたら教えてください

「おはようございます。今こっちの駅で、もうすぐ電車が来ます。あつ、いえいえー元気ですよ。のんびり泊まりましたから。そっちに着くのは三時くらいになると思います。はい、有り難うございます。また」

駅のホームで友季子に電話をする。

携帯電話なんて高いものは持てないからもちろん公衆電話からだ。少し懐かしい雑踏を背に、彩音は澄んだ空気の方へと帰っていった。

「芳くん、もうすぐ彩音ちゃんが帰ってくるんだよ」

昨日圍と話した大きな切株の上で、放課後仲むつまじく話す澄海と芳。

「そうか」

結構長い期間彩音と話していないが、この歌詞のことを伝えようと芳は思う。とても曲に合う、良い詞だ。

「嬉しい？」

悪戯っぽく上目使いで微笑む澄海に、

「ああ」

と微笑み返す。

そっかあ…、と澄海は呟き一瞬顔に影を落とす。

「どうした」

人の変化に敏感な芳は、心配そうに尋ねる。

「うん ねえ、芳くん？」

ゆっくりと、反らした視線を芳に戻し真剣な顔で言う。

「澄海のこと、どう思う？」

「え？」

「あつ……。やだやだっ、なんでもないっ。どうしたのかな、澄海

…。ごめんね、変なこと言っちゃって。 忘れて？」

いきなり顔を真っ赤にして、手を無意味に慌ただしく動かす澄海。その様子が可愛くて、おかしくて、芳はあははと大きな声で笑った。

「澄海はいい子だ。そう思うよ」

にっこりと目を細め、とびきり優しい顔で笑う。

もうだめだあ……。

「芳くんっ！」

きゅっとなら芳の手を握り、

「澄海……澄海、芳くんが大好き。これからもずっと、隣で芳くんの笑顔見ていたいよ」

カタカタと震えながらも笑顔で、想いを伝えた。

o p . 2 2 隣で笑って（後書き）

とうとう澄海が芳に告白をしました。もうすぐ彩音、合流です。そろそろ完結でしょうか。

読んでくださっている皆様、本当に有り難うございます。力を頂けています。

「あ、澄海ちゃん……」  
駅に降り立った彩音は、ホームに立っている澄海に軽く手を振った。

いつもなら声を掛けるまでもなく気付き、飛び付いてくるというのに、今はじっと目の前を見据えたまま微動だにしない。

どうしたものかと首を傾げる彩音だが、きゅっと口角を上げ、

「ただいまっ」

ぽんつと澄海の肩を叩いた。

「ひあっ……」

とても驚いたらしく目を真ん丸に開けて彩音の方を見る。

「はあ……、なんだ、彩音ちゃんかあ……」

澄海が溜め息をつく場面なんて始めてだ。

「え、私のお迎えに来てくれたんじゃないの？」

「え……」

軽くうつ向いて、じっと考え

「ああ、そうだった」

と照れ笑いする。

おかしすぎる……。

彩音は、この異変に首を突っ込んで良いものかと少し考え、そうすることにした。

「何かありましたか？」

柔らかいトーンで包み込むように尋ねる。

彩音の透き通る声は、澄海の心にすっと入っていく。

「うん……澄海、バカなことをしたみたいだよ。どうすれば良いと思っっ？」

そう訊かれても皆目見当が付かない。

「ん……どんなことをしちゃったの？」

「なんていうか……ああー、恥ずかしいことをしたみたいだよ。どうするべき？」

だから、何をしたの。思わず溜め息を付いてしまってから慌てて、別に恥ずかしくないから言っただらいい？」  
と微笑みを作る。

「澄海、好きな人がいてね。告白しちゃったの……。でも、恥ずかしくって逃げて来た」

彩音は意外な言葉に仰天した。

どうせ圍にからかわれたとか、川で滑ったとか、そんなドジな体験だろうと思っただからだ。

「だっ……誰に……？」

恐る恐る尋ねる。とてつもなく嫌な予感がする。

「あのね……芳くん、なの」

チラリと何かを窺うような顔で彩音を見る澄海。

彩音は、一瞬頭が真っ白になって何も考えられなくなる。

「芳くん、芳くん、芳くん……」。

「……んっ、彩音ちゃん？ 大丈夫……？」

心配そうに、そして少し、いぶかしげに彩音に声を掛ける。

「あっ、はい、大丈夫です」

「彩音ちゃんがヘンになったあー」

あははといったもの澄海のように笑い、弾んだしゃべり方に戻る。

「あの……芳くんを好きって、いつから？」

笑顔を作って尋ねる。

「さあ……いつの間にか好きになってたよっ。恋に落ちる瞬間が分からなくなっただけだよ」

いつの間にか……そう、突然その気持ちはやって来る。澄海にも、そして彩音にも。

その気持ちにどれだけ早く気付けるかという違いだけなのだ。

「ねえ……彩音ちゃんどうしたの？ いきなり黙っちゃって」

「ああ……うん……」

そのまま黙々と二人は歩き続ける。

なんで彩音ちゃんはいきなり元気がなくなっちゃったのかな？

やっぱりあの歌詞は、芳くんへの……。

やだよ、そんなこと考えたくもないよっ。

そう澄海が思いを廻らす中、彩音も自分のもやもやした気持ちに疑問を抱いている。

……どうしたの、私……。体の力が抜けそう。なんだかすごくショックだよ……。

「澄海！！」

大きな、男の声が前方からとんでくる。彩音も澄海も、ビクリと体をこわばらせる。

「話がある……ちよつと来て」

少し息の荒い芳だ。

「芳くん……」

澄海よりも先に彩音が反応する。

「えっ、ああ……。おかえり」

彩音はまた衝撃を受けた。

澄海と横に並んで歩いていたのに、芳は彩音のことなど眼中になかったのだ。

「話？」

澄海が尋ねる。

「ああ、来て」

ぐいと澄海の細い手首を掴み、足早に去っていった。

「あ……っ」

彩音が芳や圍と関わらないでいた長い間に何かが起こったのだと彩音は感じた。

ライブのことも怒っているのかもしれない。彩音はただ呆然と立ち尽くした。

op・24 気付かない想い

家に着くと友季子との挨拶もそこそこに二階に上がる彩音。どつと疲れが出た。

ダルい体を無理矢理動かし、模試に持って行ったボストンバッグを開ける。中には参考書の他に、楽しげなお土産が詰まっている…。

「ああ……もう」

何も考えたくなくてバツタリと布団に倒れこむ。友季子が敷いておいてくれたのだ。

澄海が芳に告白したということもショックだが、芳が彩音にどうでもいい風に接したことに何よりも衝撃を受けた。

彩音は信頼している友達にされたからこんなにも悲しいのだと思いついて。まだ自分の気持ちには気付いていない。

「たっ、ただいま！ ママっ、芳くんが好きって!!」

バタバタと賑やかに家に飛込んでくる澄海。友季子はあらあら、と驚きながら嬉しそうに応える。

この家は古い。もう五十年以上ここに経っている。だからもちろん二階に居る彩音には筒抜けだ。

「あっ、彩音ちゃんは上?! 言ってくるよっ」

幸せそうな澄海の声。いや……聞きたくないっ。今会ったら、私は酷いことを言ってしまうし……。

彩音がそんなことを考えながら布団の上で青くなっていることなど知らない澄海は軽やかな足取りを響かせて彩音の元へ向かう。

彩音ちゃんに早く言わなきゃ……っ。それで明日、他の友達にも言うんだ。

ガラッ

「彩音ちゃん、聞いてっ」

「やだ!!」

大きく鋭い彩音の声に、勢い良く戸を開けた手は固まり、体を怖  
張らせた。

しんと家中が静まりかえる。歯をくいしばり耳を手で必死に押さえる彩音と、目を見開き不自然な状態で氷つく澄海。

どうしよう……。

どうしたの…？

二人はお互いに戸惑いながら、一言も言葉を発せずにいる。

この家は、古い。階下にいる友季子にも届いた筈だ。彩音の聲はただでさえ響きわたるのだから。

「……ごめ…っ」

唇を震えさせながら絞り出した彩音の声。

「うん……」

ようやく聞けた彩音の聲に、何事もなかったかのように笑おうとする澄海。その張り付いた笑顔が逆に痛い。

「あたし……ちよっと頭冷やしてくる、ね」

澄海と目を合わさずに逃げるように部屋を出る。

台所からはトントんと規則正しく包丁の音が聞こえる。彩音は友季子の方も見ずに外へ駆け出した。

もうすぐ六時になるが夏の昼は長く、まだ明るい。穏やかに打ち寄せる波が今の心とウラハラでいつまでも見ていたくなる。

自然と行き着いたのはやはりいつもの砂浜。今は海や風の囁きにただ身を寄せていたい。

「分かんないんだもん……」

少しすねた子どものように呟く。そしてまた唇をきゅっつと噛み、木にもたれる。

分かんないんだよ、私がどうして苛立っているのか。なんでこんなに悲しいのか。澄海ちゃんと芳くんがどうなるかが、私には全く

関係ない　　というか喜ぶべきことなのに。

そして結局澄海に当たってしまった、そんな自分が許せない。

「なんで泣きそうなん？」

膝を両手で抱え顔を伏せていた彩音に、誰かが声をかけてきた。

独特なしゃべり方　健太だ。

「ああ……」

健太とは教室でも時々話すくらいで仲が良いわけではないのだが、歌っているところを見られてしまっただけからはなんとなく自然な自分でいられるのだ。

「なんか圍が彩音に会いたかったって言ってたなあ」

ぼうつと何ともなしに呟いたその言葉を聞いて、彩音はハツとした。

「圍　めぐちゃんがそう言ったの?!　いつっ?」

ぱつと顔を輝かせ、彩音は健太に訊く。

「いつって……最近ずっとなんよ。バンドでなんかあったって?」

そうか、めぐちゃんと健太君は一緒に住んでるんだっけ!

誰かがそんなことを言っていたと今更思い出す。

「ねえ……今から会いに行っても良いかな」

「健太？ オカエリ」

玄関の開く音を聞いて、圍は軽くこう言う。

「圍、お客さん」

健太が呼び掛けると素早く振り返る圍。

「お邪魔します……」

ちらっとうつ向きがちに彩音が圍を見ると、ふんわりした柔らかな笑顔で笑った。

「いらつしゃい」

「ライブは大成功。彩音にも聴いてほしかったよ」

圍の部屋でベッドに座りながら話す。

「うん……見たかったなあ、絶対ステキだったよね」

彩音はふいに遠い目をする。

「そついや彩音、今日はどうしたんだ？ 夕飯食べたのか？」

土屋家は夕飯の時間が早いため食べ終っていたのだが、彩音の様子に違和感を感じるので尋ねてみる。

「ご飯……食べてないや。ちよつと、あの家に、居たくなくて」

唇をきゅつと閉じて口角を上げる彩音はいつかとは違う辛そうな顔をしている。

「喧嘩でもした？」

そんなことしそうにないが、心辺りが全く無い為こう言ってみる。案の定、彩音はふるふると首を横に振る。

「あの……澄海ちゃんと芳くんの話、聞いた？」

「ああ、芳から聞いた。その時に彩音が戻って来たことも聞いたんだよ」

そっか……私の話もしてくれただね。ほつと安心した彩音は、

素直な気持ちを語りだした。

「なんかよく分からないんだけど……澄海ちゃんが、芳くんと付き合っつて報告してくれようとしたとき、すごく嫌な気持ちになったの。聞きたくないって強く思ったし、心が痛いって言うか……」

たどたどしい彩音の言葉を聞いて、今度は圍がシヨックを受ける。なんだって？ 彩音も芳のことが好きだったのか……。

「彩音、それはめぐのせいでもある。ってか、知ってたら澄海に脈あるんじゃないか言ったりしなかったってえのに……っ」

自分のしたことを呪うように顔を膝に埋め、髪を掻きむしる。

「えっ、ちよつと圍ちゃん?! どうしたの?」

圍の突飛な行動に度胆を抜かれた彩音は、手を抑える。

「“知ってたら”って一体なんのこと? 何か分かったの……?」

彩音は今まで、人と深く付き合わずに済むよう生きて来た。だから恋をする気持ちなんてまるで知らないのだ。

これ、言っつて良いのか……? 彩音のそんな生き方を感じ取っている圍は、本人に伝えるべきか悩んでいる。

まだ彩音が気付いていない、芳に恋する気持ち。それを知れば彼女の動揺はおさまるのだろうか。それともより、混乱するのだろうか……。 圍はじつと彩音を見つめ、思案する。

「圍ちゃん？」

これ以上彩音を不安にさせるわけにはいかない、そう考えた圍は決心した。

「あのお　彩音、もしかして芳のこと、好きだったんじゃないか？」

そして今も、とは言わないでおく。

その言葉を聞いた彩音は一瞬言葉が呑み込めなく、ゆっくりと驚きの表情を作った。

「好きって……圍ちゃんは、loveの方を意味して言ってるの？」  
「勿論」

「そんなこと……」

そんなこと、ない？　彩音はすぐ否定しようと思ったがそう出来ない。芳の真剣な眼差し、力強い腕、はにかむ笑顔、優しい言葉。そして澄んだ曲　。

芳を思い出そうとすると胸が苦しくなる。早く会いたい、あの瞳に見つめられたいといつも思っていた。

「そんなことなくないよ……。私、好きだ。芳君のこと」

ベッドから滑り落ちぺたりと力無く床に座り込む。

「ちよっ……大丈夫か？」

同じように床に座り、軽く肩を叩く。

「私好きだよ……今も。でも芳君は澄海ちゃんと付き……合ってるよ……」

もっと早く気付いていれば良かった！　そしたら澄海ちゃんともフェアに話せたかもしれないのに。彩音はとにかく後悔する。想い

に早く気付けたからと言って澄海と同じ人を好きになり、その人は澄海を好きになるといふ事実は変わらないというのに、それでも悔やんだ。

「彩音、仕方ないよ。もう付き合ってるのが現実なんだからさ。意外とすぐ別れるってこともあるし、深く悩まないで」

懸命に励ましてみるものの、彩音は苦しそうに顔を歪め涙を必死で堪えるだけだった。

o p . 2 7 後悔しかない（後書き）

『大人っぽい』と表している彩音ですが、それはあくまで外見と冷めた考えのこと。恋愛に関しては普通の女の子よりも子どもものようなんです。それ故、なかなか前に進めなかったりしますが暖かく見守ってやってくださると嬉しいです。

圍が柳瀬家に電話をし、今日は彩音を家に泊まらせると伝えた。電話に出た澄海は寂しそうに、彩音ちゃんの力になりたいな、と呟いた。

「ごめんね、圍ちゃん。……圍ちゃんが居てくれて良かった」

お風呂に入って気持ちを落ち着かせた彩音は、床に敷いた布団の上に着き、夏掛けを抱える。

「めぐも力になれて嬉しいよ。いいか、彩音。めぐは絶対彩音の味方だから。弱音も全部吐けばいい」

そう言いながら冷えた烏龍茶を彩音に手渡す。受け取った彩音は思う。友達とは此れ程までに力強いものなのか、と。今まで自分しか信じていることが出来ず、又、取り乱すことなどなかった自分が支えてもらっていることが不思議で、何より暖かい。

「明日……どうすればいいのかな」

ぼつりと溢す彩音の言葉に、圍も難しそうに顔をしかめる。

「兎に角、澄海は彩音の芳への想いに気付いていないことは確かだな。そして芳はこの状況を知らない。……普段通り振る舞えるか？」

普段通り。

いつもの自分はどのような行動をとっていたらと彩音は思い返してみる。

澄海とはあつちが話し掛けてくれることに対して、笑ったり軽く突っ込んだりしていた気がする。芳とは……。

「あれ、圍ちゃん。私は芳君と何を話していたのかな」

普段の彼との関わり、それは音楽を通してのものだけのよう感じる。

「言われてみれば、二人きりで居る姿を見たことがないかも」

「だよな……」

思ったよりも彼が遠い存在であることに気付いた彩音は、軽く溜め息をついて、

「大分落ち着いた。寝るね」

とだけ言っつて、パタリと横になり、すぐに寝息を立て始めた。彩音の唐突な行動に違和感を感じながらも、圍はおやすみと眩き眠りに落ちていった。

朝が来た。

彩音はいつも目覚まし時計がなくとも自然に目覚めることが出来るのだが、今日は時間が来ても布団に潜りこみ目をギュツと固く瞑っている。

圍の目覚まし時計が鳴っても、圍が大きな欠伸をしてベッドから立ち上がった後も、それは変わらなかつた。見かねた圍がそつと彩音を揺り起こす。

「おはよ、彩音。朝だよ」

応答がない。布団から顔を出さない彩音に痺れを切らし、ひっぺがそつと試みる。

「もー起きろって」

彩音はしつかりと布団を握り締め、圍に抵抗する。なんだ元気に起きてるんじゃないか、と圍は微笑する。

「ほら、早く服着替えて顔洗ってご飯食べる！ 遅刻するぞ」

半分笑いながら圍がこう伝えると、彩音は間髪入れずに返事した。

「……やだ」

突然の子どもっぽい発言に圍は目を見張る。やだ？ 何が。まるでダダをこねているガキじゃないか。

「もうやだあ。めぐちゃん一緒に遊ぼうよー」 続けざまにこの発言。何がどうしたと言うのか。慌てて布団を剥がすと、少しふてくされた表情の彩音が圍を見つめていた。

「どうした、彩音」

「どーもしないよーだ。ねえめぐちゃんめぐちゃん！」

「え、何」

「読んだだけー」

ニコツと笑い布団から起き上がる彩音。まるで意味が分からない。幼児返りと呼べるような奇怪な行動に圍はただ困惑した。

洋服に着替えるときも、ずっとニコニコと笑いながら楽しそうに鼻唄をし、ときに圍を盗み見ては手を振る。その自由気ままさはどこか澄海を連想させた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1567a/>

---

ムジカ

2011年1月21日02時48分発行